



年のせいでもなかろうが、記憶がどんどん減って行く感じがする。子どもの頃の思い出は？と訊かれてもとっさに思い出せるような出来事が浮かばない。それだけのほほんとした平穏な子ども時代を送っていたということかもしれないが。

子どもといえは、わが子の記憶もあまりない。今のように電子媒体があれば、それこそ、どんどん書き留めていけるんだろうけど、あの頃の日記には家族イベントと読んだ本のタイトルくらいしか書かれていないし。

ちなみに今の私は、10年以上のブログ発信のおかげで「いつ何をしたか、どこに行ったか、何を見たか？」等、記録はバッチリである。検索かけたら即甦る。ブログは記憶の玉手箱。その分、自分の頭は空っぽである。空っぽの領域には新しい事柄をどんどん詰めていけばいいんだよ。

1人目の息子は私が働いていたこともあり、毎日の生活に追われて、子どもと接する時間が少なかった。2人目の娘は生後2歳になったばかりのときに、私が完全失聴したため、コミュニケーション自体ができていなかった。

片言をしゃべり始めて、小学校に通う頃まで、子どもというのは本当に面白い発言をする。息子は「ありがとう」がうまく言えず、「あがりとう」。「折り曲げる」が「おりがめる」になっていたのも懐かしい言い間違いである。娘もきっと、一生懸命いろんなことを面白おかしく話してくれていたんだろうけど、簡単な言葉を口話で読み取るのが精いっぱいだった。人工内耳で音を取り戻して21年、それでも早口の孫の話は7割ほどしか聞き取れない。

2016年の手塚治虫文化賞漫画大賞受賞作の「よつばと！」は面白そうなので、図書館で借りて全12巻イッキ読み。第13巻は待ちきれずに自分で購入した（笑）

年齢5歳の「よつば」はとーちゃんと2人暮らし。よつばの国籍は不明だが、とーちゃんとは実の父子以上に愛情深い関係を保っている。空気読めないけど元気いっぱい怖いもの知らず、喜怒哀楽満開のよつばちゃん。ときに大人顔負けのせりふがちょっと規格外の子どもという感じで、笑えるというかほほえましいというか、「あるある」というか。

翻訳業でイケメンのとーちゃんや、よつばと仲の良い隣の家の三姉妹など、周りの人物はふつうにカッコいいコミック画なんだけど、よつばだけが四コマ漫画のような作画である。漫画で眼の形だけで、これだけ喜怒哀楽を表情豊かに表せるのがスゴイ。悲しくて涙があふれそうになる顔アップでは、読んでいるこっちまで涙ぐみそうになる。決意の眼、驚きの眼、うれしくてしかたがない眼。

「どうぶつずかんくれたからな！ちょっとしたおきもちです」と言う。とーちゃんが初めてピザを注文してくれたとき、ピザって「きっとゆめのようなあじがある」と言い、「こんなせいようふうなものが」がうどんや丼みたいに出前できることに驚いたり。

砂場で作るものは「おとしわな」確かにわなである（笑）砂を固めて作るたい焼きの尻尾が崩れていたりすると「しっかりつくらないととーさんする！」とのたまう。お掃除のお手伝いも「よつばがほんきでしたら、もうてがつけられないよ」だって。

とーちゃんが台所にたまった洗い物がめんどうだとサボると、しかたないなと言いつつ、代わりに洗ってあげるよつばちゃん。寝転がるとーちゃんは「よつばはえらいなー」と言う。「とーちゃん、そういうのはよつばのきょういくじょうよくないから」と言いながらも健気に精出すよつばちゃん。

このコミックス、第13巻が出るまで2年半もかかったらしく、14巻はいつになるかわからないというのがファンの嘆きだそうです。

『よつばと！』

あずまきよひこ

KADOKAWA 電撃コミックス